

第3回 舞台芸術科（仮称）設置検討協議会

議 事 録

- 1 日 時 平成30年3月7日（水）
午後4時00分～6時00分
- 2 場 所 横浜情報文化センター 7階 小会議室
- 3 出席者 能祖 將夫 荒木 正 川端 麻穂
久我 肇 近藤 建吾 田中 俊穂
堀江 信夫 眞野 純 (敬称略)

1 開会

(事務局)

定刻になりましたので、ただ今から第3回舞台芸術科（仮称）設置検討協議会を始めさせていただきます。本日は、舞岡中学校稲童丸校長は所用により御欠席でございます。稲童丸先生には、先に資料を御覧いただき御意見をいただいておりますので、後程御紹介をさせていただければと思います。これからの議事につきましては、進行を能祖会長にお願いいたします。

2 議事

会長（能祖構成員）

それでは、始めます。議事に入る前に、「会議公開の可否について」です。本日は、教育内容及びその他が議題となっておりますが、協議は原則として公開したいと考えております。なお、未成熟な情報を含む議論が展開され、非公開とすることが望ましい場合には、非公開とさせていただきたいと思いますがいかがでしょうか。

(賛成の声)

はい、ありがとうございます。それでは、協議を原則として公開して行うことといたします。

議題に入る前に、前回までの協議の確認も兼ねて「基本コンセプト」について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

参考資料1を御覧いただきたいと思います。前回、基本コンセプトについて御議論をいただきました。その中で、2③ですが、コミュニケーション能力の育成という観点で、4つの要素等で構成されるコミュニケーション能力の育成という整理をさせていただいた中で、下線を引かせていただいておりますけれども、前回、国の審議会の言葉を活用させていただいて、「集団を形成し」という言葉にさせていただいておりましたが、「形成し」という言葉ではなく、という御意見をいただき、「集団の中で、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと」、こうした中で、コミュニケーション能力を育成していこうということで整理をさせていただいておりますので、この部分を修正した形で、今回の舞台芸術科（仮称）の基本コンセプトとしたいと考えております。よろしくお願いたします。

会長（能祖構成員）

はい。ただいまの説明に御質問、御意見はありますか。よろしいでしょ

うか。

(賛成の声)

会長（能祖構成員）

それでは、議題に入ります。まず、「教育内容」についてです。前回の協議を踏まえて、「教育内容」について事務局にとりまとめていただきました。報告書の重要なポイントになりますので、説明をお願いします。

(事務局)

それでは、本日御用意させていただいた資料1、2及び3、主に資料1と2を使って御説明をさせていただきます。資料1につきましては、前回議論をいただくにあたって視点を整理してお示ししたものでございます。資料2は前回の議論を受けて再度整理をさせていただいたものでございますので、教育内容について、資料2でよろしいかどうか、本日ご協議をいただければと思います。前回、「1検討にあたっての基本的な考え方」と「2専門教科・科目としての教育内容の検討」として、いくつか視点を御示しさせていただき御検討をいただき、御意見をいただきました。それを踏まえて、資料2「教育内容について」では、基本的な考え方について、参考資料1でお示しをした基本コンセプト、これを踏まえ、「舞台芸術科（仮称）としての特色ある教育活動を展開できる教育内容とする」、ということで整理をさせていただいております。その上で、専門科目の教育内容等についてということで、具体的にどういう内容を盛り込んだらいいのか、ということについて整理をさせていただいております。それでは、資料2の2（1）から1つずつ説明をさせていただきますが、前回「演劇に関する科目のまとまりの整理の検討」という言葉で括らせていただき、その下にどういう科目を置くかということで御検討いただきましたが、基本コンセプトにある、演技、舞台技術、企画制作等の理論から実践までを通じたという、その中でどういう科目を設定するかというふうにまとめたほうがいいのか、という御意見を前回いただきましたので、（1）にございますように、「演技、舞台技術、企画・制作等の理論から実践までを通じた幅広い演劇教育が実施できるよう、以下の区分で構成する専門科目を設置する」、とまとめております。その中で、まず①ですが、演劇の理論や歴史に関する科目、その次にねらいとして、演劇に関する基礎的な知識の定着を図る、と整理をしまして、例として、演劇論、演劇史、戯曲研究などを扱う、ということで①の整理をしております。次に②として、演じるための基礎に関する科目、ねらいといたしましては、演技に必要な技能、身体能力等を育成するということといたしまして、例として、身体表現基礎、舞踊、発声法・呼吸法というような科目が考えられるという整理をさせていただいております。③といたしまして、実際に演じることに係る科目、ねらいといたしましては、学科の中心として、演じることの基礎から応用までを学び、上演することのできる能力を育成することとしまして、例として、劇表現、創作演習な

どの科目が考えられるというところがございます。それから、④といたしまして、公演の企画・制作、舞台技術等に関する科目ということで、公演に必要な実践的な知識・技能等を育成することをねらいとしまして、例として企画・制作、照明、音響、舞台監督、舞台美術などについて知識を得ていくということで整理をさせていただいております。これが専門科目として設置することが考えられる内容として、

(1)として整理をしております。次に(2)ですが、前回の御議論の中で、成果発表をどうしていくのかという議論をしていただきました。その中で、作品を作り上げるプロセスを一通り経験して成果としてそれを発表していく、ということを追加した方が良いのではないかとことや、成功体験も失敗体験も含めて成果発表の場は多い方が良いのではないかと、といった御意見もいただきましたので、(2)といたしましては、「作品を作り上げる一連の課程を経験するため、学習の集大成としての卒業公演を含め、学習成果の発表を3年間で複数回実施をする」、と整理をさせていただいております。次に(3)、伝統芸能については、伝統芸能を何か1つに決めて、それを1年間学ぶということではなく、様々な伝統芸能に触れて、日本人としてのアイデンティティー等に繋げていくということも大事ではないか、必ずしも何か1つにテーマを絞る必要はないのではないかと、といった御意見をいただきましたので、(3)として、「伝統芸能については、基礎知識や表現技術を学ぶとともに、日本文化に対する理解を深めるため、特定のジャンルに偏らず、幅広く学習できるようにする」、と整理をさせていただいております。次に(4)舞踊についてですけれども、クラシックバレエが全てのダンスの基本となるといった御意見ですとか、演者ばかりではないので、クラシックバレエを必修ではなく選択としてもいいのではないかと、といった御意見がございました。その中で(4)といたしましては、「舞踊については、コンテンポラリーダンス、クラシックバレエを中心として、幅広く学習できるようにする」、と整理をさせていただいております。

(5)ですが、基本コンセプトにもございますが、幅広い進路希望に対応していく必要があるということで、出口として、高校卒業後演劇を学ぶというだけではなくて、一般の大学に進む場合もある、そういったことにも対応できるよう配慮する必要があるという御意見がございましたので、(5)「幅広い進路希望に対応できるよう、共通科目での学習内容を扱う専門科目の設置も検討する」、と整理しております。それから(6)ですが、実際のレッスン規模のお話を前回いただきまして、その中では1レッスン規模は20人、最大でも25人程度、それ以上だと、アシスタント等の数も相当程度必要になってくるというお話しをいただきましたので、「劇表現や舞踊等の実技科目については、20～25名程度のグループ形式により、きめ細かな指導を実施する」、ということで整理をさせていただいております。それから(7)、こちら基本コンセプトにもございますが、「外部機関との連携により、現場での体験や学習の機会を設ける」、ということで整理しております。裏面になりますが、3「共通科目の教育内容について」でございます。前回も御議論いただきましたが、(1)「専門科目とのバランスに配慮し、幅広い教養を備えるとともに、大学進学にも対応できるよう、必要な科目を設置する」、ということで共通科目も

必要な科目についてはしっかりと設置をしていくということです。それから、(2)ですが、いわゆる選択科目である芸術科目、音楽や美術につきましても、それを例えば音楽だけに限定してしまうということではなくて、幅広い豊かな教養を身に付けた生徒を育成するため、特定の科目に偏らないように、選択ができるように設定をするということです。それから最後に(3)として、「共通科目において舞台芸術の要素を扱うことについても検討する」として、例といたしまして、国語ですとか、英語の時間の中で戯曲を扱うですとか、そういったことを検討する必要があるということで、共通科目の教育内容として3点まとめさせていただいております。前回の議論を踏まえて、教育内容について総括してまとめたものが資料2になりますので、御協議の程よろしくお願いいたします。

会長（能祖構成員）

ありがとうございました。それでは、協議に入る前に、事務局の説明に質問があればお願いします。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、資料2についての御意見をいただきたいと思っております。なお、本日ご欠席の稲童丸さんから、御意見をいただいているとのことですので、事務局から説明をお願いいたします。

（事務局）

稲童丸校長先生には、資料2を主に御覧いただき御意見をいただきました。まず、(3)の伝統芸能についてです。前回、稲童丸校長先生から、伝統芸能については、何か1つということではなくて、色々なものを体験させるということが、重要なのではないかというお話がございました。その中で、舞台芸術の学科で伝統芸能を学ぶのであれば、例えば、能・狂言、日本舞踊、あるいは郷土芸能、歌舞伎、謡、和装、所作などを幅広く見たり、体験できると、幅が広がるのではないかという御意見をいただいております。なお前回、稲童丸先生から、近隣の舞岡高校という高校で「和装と礼法」という科目を設定しているのではないかというお話がございまして、私共で確認させていただいたところ、平成25年度から和装について、総合的な学習の時間の中で、和装体験ということで舞岡高校は取り組んでおまして、平成27年度から3年生の選択科目として「和装と礼法」という学校設定科目を持って、現在も続けているということでございます。実際には、ティーム・ティーチング、TTという形で、国語の先生が入って和装と礼法について非常勤の方に入らせていただいて、国語の先生とセットでその科目を運営しているということでございます。着物を着て動いてみる、所作を学ぶ、そういった体験をしても良いのではないかという御意見をいただいております。それから(5)の幅広い進路希望に対応できるようという部分について、大学入試科目を深めることができる、個人で選択できるような科目が設定できると良いのではないか、という御意見をいただいております。資料3に他都府県のカリキュラム一覧がございますけれども、前回の議論でもございましたが、例えばAという学校では、3年次に自由選択として科目が設定されて

いますし、Bという学校にも、特に3年次には共通、それから専門選択から選択できるようになっており、こういった科目を用意できると大学入試への対応という意味で良いのではないかと御意見をいただいております。それから3「共通科目の教育内容」のところでも、大学受験等で、指定校推薦、AOなどの推薦制度の募集にも対応できるような科目が設定されることが望ましいのではないかと、というお話もございました。それから、先程御説明をさせていただきましたが、芸術科目については、音楽、あるいは美術に固定するというのではなくて、生徒が選べるようにすることが大切ではないかとのお話もございました。最後に共通科目で舞台芸術の要素を扱うということについては、例えば、いくつかの有名な作品の抜粋でも良いので、国語や古典の授業の中で戯曲を扱うことにより専門科目としても幅が広がるのではないかと、シェイクスピアのある場面の抜粋を英語の授業で扱って専門科目の幅を広げると良いのではないかと、という御意見がございまして、基本的には資料2について御理解をいただいた上で、補足で先程のような御意見をいただいたという状況でございます。

会長（能祖構成員）

ありがとうございました。確認なのですけれども、例えば3（1）の専門科目とのバランスに配慮し、幅広い教養を備えるとともに、大学進学にも対応できるよう、必要な科目を設置する、あるいは、自由選択の中に、大学受験に対応できる科目があるというのは、演劇は高校3年間でやりつくしたのでいいというような生徒にも対応できるという意味合いなのでしょうか。

（事務局）

それもあるかもしれませんが、3年間学ぶ中で必ずしも演劇の大学ですとか、就職を考えるという生徒ばかりではなくて、例えば文学部に進学するなど、他県の学校の状況を見ても、色々な進路が考えられますので、そういった科目が選択できるようになっていると、生徒の進路の幅も広げられるということです。

会長（能祖構成員）

以上の御説明、あるいは稲童丸先生の御意見も踏まえた上で、ここはかなり重要な部分だと思いますが、どなたか御意見いただけますでしょうか。荒木先生いかがでしょうか。

（荒木構成員）

今、御説明があった資料2の科目を見ていくだけでも、資料3の網掛け部分の専門科目はほとんど入っているのかなと見ていました。裏面の、進路を保障するためになるべく幅広い選択科目が必要であろうというところは、まったくその通りであろうと思います。専門科目で25単位というのは、卒業単位に比べて非常に重たいので、国語、英語で戯曲等という記載がありますが、例えば国語とか英語を上手く使

うことによって、必修科目を読み替えていくという制度がございますから、そういったことを上手く取り入れることによって、選択の幅を広げることができるのではないかと思います。進路保障という観点からも、そういったことを積極的に考えていただけるとよろしいかと思います。

会長（能祖構成員）

ありがとうございます。川端さん、いかがでしょうか。

（川端構成員）

私は前回出席できなかったので、乗り遅れている部分があるかもしれませんが、資料3に記載されているカリキュラムですと、理系への進学はまず難しいというのが決定的になってしまう可能性があります。多様な進路という中にどこまで入のかということですが、学習指導要領が今後改訂になりますのでそこを睨んでいく必要もあるかとも思いますが、例えば、物理基礎とか数学Ⅲは入りようがないので、もし、そういった選択も残すのであるならば、そこをどうクリアしていくのかというところが難しいところかと思えます。理科は、いずれも科学と人間生活とか生物Ⅰは一応置いているというのが、現在の学習指導要領への対応だと思うのですが、今後学習指導要領が改訂になった時点の必修科目を入れたところで、おそらく文系の科目が今の認識では入ると思われるので、資料だけを見ていうのであればそういったところが気になります。

（事務局）

少し事務局で補足させていただくと、他県では文系に進む生徒さんが多いという状況になっています。

会長（能祖構成員）

そうですね。久我さん、いかがでしょうか。

（久我構成員）

私は教員ではないので教育の専門的な立場からではないのですが、決められた時間数の中で何を選択していくかという問題になってくるかと思えます。この学校のこの学科に関しては、こういう特徴を持った学科ですよ、ということを、カリキュラムが決まったときには特徴が見えてくると思えますので、そこできちんと説明をしていくということが必要なかと思っています。例えば、理系にも文系にも対応できる学科ではありませんとか、はっきりとこの学科はこういう特徴を持った学科だということをきちんと理解していただいた上で入学していただくということが重要なのかなと思っています。

会長（能祖構成員）

通常、理系、文系というのはいつ頃分かれるのでしょうか。

（川端構成員）

学校によりけりです。単位制となればまた別ですし。

会長（能祖構成員）

転科というか、舞台芸術科に入ったものの2年生からは舞台芸術ではなくて理系に進むというようなことは可能なのでしょうか。

（事務局）

学科が違った場合に、他の学科にというのはなかなか難しい。

（田中構成員）

ほぼ転校と同じくらいの壁があります。

会長（能祖構成員）

そうですか。田中さん、御意見いただいてもいいのでしょうか。

（田中構成員）

学力という観点からみて、まず、「2 専門科目の教育内容等」ですけれども、学力の三要素ということで解析していくと、知識、技能はしっかり入っていて、思考力、判断力、そしてなんとといっても舞台芸術は表現力に関しては学ぶ機会がたくさんあると思います。また、3年間で複数回公演等を実施するという中で主体的に取り組む態度という、学力の三要素と解析していったときには、この中にしっかり入っている内容になっているのかと思います。また、裏面の共通科目の教育内容のところ、舞台芸術科として40人であれば、単独クラスを作り単独クラスで動くのが基本かとは思いますが、できるならば、そのクラスを学校全体の活力にしなければいけないと思うのです。例えば、体育、芸術、英語の習熟度などで分かれるときには、普通科等の併置学科とともに学ぶような機会も学校の中にあると、舞台芸術科のすごく元気な色々な個性を持った生徒たちと併置する学科の生徒たちが学びあえるような場を、考えれば作れると思うのですが、併置の意味というのをより、普通科等の併置学科にとっても意味があるというところに持っていくには、そういうようなところも意識して作っていくのがいいと思います。また、その学校としての学校経営を考えても、一体感を作るところで正のスパイラルというのでしょうか、学校全体の活力というのを作っていきけるのではないかと思います。ですから、共通科目に関する考え方も基本的には、音楽や美術も、できたら併置する学科の生徒と学ぶような機会を作れるといいのかなと思います。基本的には、専門科目、共通科目に関する方向性は資料に記載のとおりで良いのではないかと思います。

会長（能祖構成員）

2（1）①、②、③、④というような分け方、その目的と仮の科目名について、近藤さんいかがでしょうか。

（近藤構成員）

この①、②、③、④という分け方としては、非常に適切だと思います。ただ、これだけのことを学ぼうとするとかなり多種多様なことになってくるので、ある程度、少しは絞っていく必要も出てくるのかなというところがあります。相当専門性の高い分野のことが全部網羅されているので、これを高校の3年間で全てをとというのは、触りだけということであれば、ある程度可能かもしれませんが、卒業した時に形としてある程度身に付いて、としようとしたときには、プロの演者でもこれだけのことを自分の身に付けようとしたら相当な時間を費やす必要があるのではないかなというところは心配するところではあります。分け方としては、非常に明快だと思いますので異論はありません。

会長（能祖構成員）

一通り広く浅くという考え方で良いのですよね。もちろん専門性はあるのですが、とはいえ、考え方としては広く浅く触っておくというか。もっと絞り込んで、少し深いところまでいくという考え方と、一通りやはり高校卒業時点で舞台芸術に関する事はある程度学んでいますよというような、全般に渡って。このどちらの方向にいくかというのはあるかと思えますけれども。

（田中構成員）

プロの養成ではなくて、あくまで高校というふうに考えていただいた場合には、会長が言われていた後者のほうになるのではないかと思います。

会長（能祖構成員）

そうですね。では、堀江さん、全般に渡っていかがでしょうか。

（堀江構成員）

少し別の観点からお伺いをしたいのですけれども、こういう学科でできるだけ優れた生徒さんを集めようとした場合に、どこが魅力になるのかなと。あるいは、他県から受検できるのかどうかわからないのですけれども、神奈川にはこういう学科があるというアピールとか、それによってこの学科の価値が上がって、優れた生徒さんが集まって、その中で切磋琢磨が行われると。どこが特徴なのか、というふうに考えていたのですけれども、いかがでしょうか。例えば、①、②、③に加えて④があるとか、あるいは（7）で KAAT や青少年センターで実際の舞台に触れるとか、そういったところが資料3の他県の4つの高校からはあまり窺えないのかなと思います。そのあたりが特徴になって、ただ単に専門的ということではなくて、幅広く

裏方なども経験できて、それは舞台に立たなくても将来社会で役に立つとか、そういうアピールができるのかどうか、そのあたりについてはどうなのでしょう。

(久我構成員)

県立高校の入学に関しては住所要件があって、神奈川県に住所を有する方を受け入れていますから、全国から優秀な人材を集めようというタイプの学校ではないことは確かです。他の都府県の学校とどこに差異があって、特徴があるのかという点は、ここからむしろ神奈川県としてどこを特徴付けていこうかというところに、これからの話になってくるのかと思います。ただ、青少年センターや KAAT など県にはそういった良い施設がありますので、そういったところとの連携を上手く図っていきながら、教育をしていくというのは、ひとつの特徴になるのではないかと思います。

(堀江構成員)

県内には桜美林大学も劇団四季もあって、もしそういったところとの連携で何かやらせていただけるのであれば、それは他のところにはない特色ですし、それを魅力に感じて優秀な生徒が集まってくる。それは、専門的にプロになるというだけではない、幅広い、知識、技能だけではないところを学べる機会が提供されるので、より一層幅広い進路希望の生徒さんに対応できるものと言えるのでしょうか。

(久我構成員)

高校の時の3年間の経験というのは、本人は意識していなかった、あるいは学校とか教員が意識して教えたことではないところに興味・関心がわいて、そこから更に伸びていくということもありますから、色々な経験ができるというのは非常に大切なことですし、選択の幅が広いということは、それだけでも自由度が広いということだと思いますから、そこは、もし実現できれば特徴にはなると思います。そこは、他の都府県でもこのカリキュラムを見る限り、そういったことを意識しているのではないかと思います。意識しながらも、限られた時間の中で、3年間でどこまで、近藤さんが言われたように、これを全部教えるのはむしろ難しいよというくらいのことを考えて、理想的な形を今考えてはいますけれども、実際に、現場にあてはめていった時に、どこまで実現できるか、その中で何を特徴として打ち出していくのかというのは、これからのことだとは思いますが、学校がどう考えたいかということも出てくると思います。

(堀江構成員)

教育課程に詳しくない私としては、非常に芸術性の高い KAAT、非常にポピュラーな演目をわかりやすくやってくれる四季、それから青少年健全育成の青少年センター、こういうものがバックアップしていくというか、そういったところとの繋がりで学べますよというようなことが特徴になって、優秀な生徒さんが集まる、あるい

は、神奈川県の実策の正当性がアピールできるということが大事ではないかと思っ
て質問をさせていただきました。

会長（能祖構成員）

高校の立地がどこか、ということにも関わるかもしれませんよね。眞野さん、全
体的にいかがでしょうか。

（眞野構成員）

私も近藤さんと全く同じ意見で、広く浅くといってもやはり限りがあろうかと思
いますので、そこは本当に丁寧に検討して、それからどういう特徴を出すかですよ
ね。青少年センターや神奈川芸術劇場で、どういうふうに関係できるのかというこ
とになれば、またこういうふうな会議をもって、例えば劇団四季さんの何かと連携
できるのかどうかというところは、別に会議を持ってやらないとなかなか難しいと
思う。それは青少年センターも同じだと思います。私共は神奈川県の公益財団法人
ですが、県の学校の特徴でもあり、青少年センターの特徴でもあり、神奈川芸術劇
場の特徴でもあるというように、改めて議論をしていかないと、どのように連携を
していくのかというのは少し難しいかと思ひます。また、学校の先生という立場と
現場で作品作りに携わっている人間とは基本的な姿勢が違ひますので、なかなかそ
このところの親和性をどういふふうにな手くとするのかなと思ひます。KAATでも高校
の教員免許を持っている人間が何人かいたり、小学校、中学校の教員免許を持っ
ていますという人が何人かいたりするので、そういう人たちに聞いてみたら、これは
難しいですよとネガティブに言われることもあったものですので、少しお話ししてお
こうかなと思ひました。特徴を出すためには、どこかで削いで、どこかを厚くする
という形で、神奈川県の舞台芸術関係の学科はこれを中心に据えるのだ、これが他
県とは違ひところなのだといふ、そういうところが少しあると良いですよ。

会長（能祖構成員）

教員と現場の人間との姿勢の違ひといふのを少し御説明いただいてもいいでしょ
うか。

（眞野構成員）

教育現場では、教育ですよ。私も教えたことがあるのですが、やはり教員とし
て教える時と、仕事で教える時とでは基本的な姿勢がちょっと違ひように思ひので
す。片方は労働として教えるわけですよ。君はこれが労働なのだ、と。これをしないと
給料が払えませんが、ということですよ。給料をもらうためには、ここまでの技
術がつかないと商品になりませんが、ということをお話している訳ですよ。ところが、学
校ですとそれは純然たるこれからその人が生きていくための教養として、あるいは
そういうものを将来めざすために必要なものとして教えていくので、やはりそのあ
たりの差といふか温度差といふものがかなり大きなものだと思ひます。特徴を出

すために、どこを削ってどこを足すかということについても、そのあたりを睨みながら考えていけたら、広く浅くが、実は、非常に特徴を持った広く浅く、であるというようなものに繋がっていけるといいなと思うのです。専門科目を大きくこの中に入れていくことだとか、色々な工夫が出てくるだろうと思うので、やはり特徴がないと、神奈川県芸術関係学科の設置というのが事件にならないといけないなと思うのです。中学生の選択肢の一つとしてこういうものができた、と。そういうところが、この次の段階ではありますが、さすが劇団四季が本拠地を置いている、さすが神奈川芸術劇場がある、音楽堂があつて、青少年センターがあつて、さすが神奈川県、こういうふうに来たか、というふうに見えるといいですね。

(近藤構成員)

舞台芸術科というだけで特殊性の高い学科ではあると思うのです。そうすると、どうしても、やはり舞台芸術ではないのではないかと思った生徒さんに対して、理系も学べる、何も学べるというところを広く残して置くと、特殊性が失われていってしまうと思うのです。ですから、特殊性のところではどれだけ魅力があるかと考えると、我々はこういう言葉が並んでしまうと、プロ意識としてきちんとやらなくてはというのが先になってしまうので、そこのバランスをどう取るかというのがありますよね。教育の現場としては、10代の若者がこれからの人生をどういう方向にでも進んでいけるといえるのは非常に大切なことだとは思いますが、舞台芸術科を選んだ、いくら10代の半ばとはいえ、この学科を選んだ時点で、ある程度特殊性を持って学ぼうとしている生徒が来るというのは前提なのかな、と演劇をしている身としては思うのです。教育的な立場から全く別の立場から見るとそうではないかな、という思いはあります。

(久我構成員)

以前、能祖会長が演劇あるいは演劇教育にスタンダードはない、その中で皆やっていますというお話をされてきました。もしかしたら、ここに書いてあるのは、そのスタンダードを整理したような感じなのかなと思います。この中で何にウェイトを置いて特徴を出していくかというのは、これからの学科の特徴づくり、魅力づくりなのかなと思いながら聞いていました。

会長（能祖構成員）

例えば、大学で演劇を学ぼうとする人間に、具体的に言うと入試の面接等で、「君は何故、大学で演劇を学びたいと思うのか」ということは、わりと良く聞く質問なのです。つまり、何故大学で、ということはどういう意味かということ、何故劇団の養成所でもなく、専門学校でもなく、大学という場で演劇を学びたいのかということなのです。それに対して色々な答えがあるのですけれども、高校で演劇を学ぶ意味というのは押さえておいた方が良さだろうと思うのです。それから、眞野さんのおっしゃった姿勢というのはおもしろいなと思っていて、もちろん人格教育で

あるとか、人間教育が前提ではありますけれども、それこそ KAAT があるとか、劇団四季があることによって、プロの息吹に触れる、肌で感じる、学ぶというか、そういった場が持てるというのかなと思うのです。プロが働いているところを見ることで背筋がしゃんとするというような、これを職業にするということはこういうことなのかということがわかってくるような、そういった時間が持てる特徴になるかなと思うのです。それから、科目はこれからもっと整理しなくてははいけませんけれども、すごくシンプルにいうと①は、大きい意味での世界の演劇史、日本の演劇史くらいは知っておこうということ。それから②は身体づくりとか、呼吸法の本当にベーシックなところ、これは何をやるにしても知っておいた方がいいですし、③は演じたい人間にとってはここが要になるかと思えますけれども、演じることの基本、④は、芝居は当然演じるだけではできませんので、集団の創作ですから、それ以外のこと、テクニカルなことも含め、制作も含め少し知っておこうということ、簡単にいうとそういうことですよ。これをこの時間内でこのベーシックなところをやる、それから3年間で何本か作品作りに携わるといって、かなりの経験になってくるのではないかなと思うのです。他に御意見はありますか。

(眞野構成員)

未だかつてないことなので、教科書はないのですよね。他の都府県ではどういふものを素材にして取り組んでいるのでしょうか。

(事務局)

独自教材を作成しているそうです。

(眞野構成員)

そうですね。独自教材を作っていないと難しいと思います。

(田中構成員)

もちろん年間のシラバス、指導計画は作った上で、独自教材を作って取り組むことになると思います。

(荒木構成員)

前回の会議でも、眞野館長が KAAT でも教育に協力できる人材はいるとおっしゃってくださったのですが、先程の姿勢の話ではないのですけれども、実際に教えていただくとすると、授業でいうと、毎週同じ時間に来てそこは必ず授業をやっていたかなければいけないとか、教材の作成にご協力いただくとか、そういった負担もかなりその方々に強いることになるので、劇団等の専門家の方々であってもそれ以外の資質も必要になってくることもあると思うのです。そういったことを考えると、ここまでの幅広い科目をやっていくのは非常に大変なことなのだろうな、特に授業を組み立てるといふことに関しては相当大変だろうと思います。他の専門

学科と違うところは、特に商業とか農業であれば、免許もありますし、専門家もいるはずなのですけれども、この学科は、学科を設置しても専門家はいないだろうと思うのです。逆に全体を見られるようなシステムにしていけないと、色々な講師の方々との連携ということを考えてと厳しいのかなというところがあるので、科目と同時にそれを教える人と、全体を統括するようなシステム作りが学校づくりとしては肝になっていくのだらうなと思うので、そういったところも考えながら科目のバランスも見ていく必要があるのかと思います。

(事務局)

他県では、舞台芸術の学科をまとめる学科長という方が1人、その学科全体を統括している方がいます。その方が、カリキュラムや非常勤の方に来てもらう場合に全体を統括しています。演劇にある程度精通していて、学科全体をまとめられる方で、神奈川の職でいうと総括教諭という教諭をまとめる職がありますけれども、そのあたりの地位にある方です。

(荒木構成員)

演劇のこともよくわかっていて、高校のカリキュラムのこと等もわかっている方でないとなかなか務まらないということですよ。

(事務局)

他県では、教員の方がやる場合は、国語の先生が担っているケースが多いと聞いております。

(堀江構成員)

東京であれば演劇の顧問が相当できる先生もいるでしょう、神奈川以上に。神奈川の場合、そういう中から優れた人に来ていただく、総括教諭クラスの人に、ということでしょうか。

(荒木構成員)

具体的には何ともいえませんが、演劇部で脚本を書いているような教員もいますし、指導している人もいますので、そういった人の中からお話のあったようなポジションに相応しい方というのは、神奈川にも当然いらっしゃるのかと思います。

会長（能祖構成員）

もう少しだけ踏み込ませてください。学年に沿って教える順番は、同時並行で段階を経ていくのか、それとも最初は理論的なところから入って実践的なところに入っていき、大きくいうとどういう順番がよいでしょうか。理想的にはどうでしょうか。理論から入るとみんな飽きてしまいますよね。

(眞野構成員)

同時並行でやるとしたら、どういう組合せでできるだろうなど考えていたのです。互いに跨ることが多いので、跨ることを理解した先生が教えなければ上手くいかないかと思っていました。組み合わせ次第ではやれると思うのです。それぞれ別のように見えますが、実は同じ内容を持ったものがあって全てが関連していますよね。ですから、これを括っていくと、①～④までの中身をそのまま持ったまま圧縮できると思うのです。順番は、全て同時並行でやるべきだと思います。並行して全体を進めていくための整理を一度やってみた方がよいのではないかと思います。

(堀江構成員)

(2)のように、成果発表を複数回やると、そうすると、やってみて初めて気が付くことがあるので、それはどんどん次の時に深まっていく、あるいは自分で関連性をそこで学んでいくこともできるだろうと思いますので、(2)は非常に大切だと思います。

(眞野構成員)

先生が非常に大切です。

会長 (能祖構成員)

先生次第というところがありますよね。

(久我構成員)

今後の議論になってくるかと思いますがけれども、同時並行でやった方がいいということになると、1年生の時から、教員、講師をそこまでしっかり確保しておかないといけないという問題があります。進め方というのは非常に大事かと思います。

(眞野構成員)

本当は世界史を教えていらっしゃる先生で演劇の歴史についても教えることができるような方がいる。あるいは、国語も国語の先生が現代戯曲から古典まで含めて読むことを教えることができる、そういうことがあると、それが特徴といえるかはわかりませんが、そういうことがあって、全体に連続性を持っていると、先程お話にあったように併置する他学科、例えば普通科の生徒さんとこういった専門学科の生徒さんが共存といいますか上手く一緒にやれるし、なおかつ先生も両方のことを教えられると思うのです。よく言われていますけれども、日本史ではなくて世界史だ、アジア史ではなくて世界史だと言われているように、世界の歴史の一部として日本史が上手く有機的に教えられていない、とよく言われますよね。この学科ではそうではないのだと。戯曲研究は国語の先生と一緒に教える、古典の先生が歌舞伎の概論、高校生が知るべき程度の概論を教える、ということがあると、とてもおもしろいのではないかと思います。

(久我構成員)

この分野に限らずそういったことは言われていまして、関連する学科のことも含めてカリキュラムを編成していくということは、非常に意識されて編成していくことにはなるかと思います。そういったことが実現できれば、非常に良い学校になるかと思います。

会長（能祖構成員）

特徴といった場合に、資料3のA、B、C、Dの学校を見ると、カリキュラムを見る限りAは、舞台公演は3年生だけですよね。創作演習でやるということですよ。Bは、総合演習というところで、2、3年でやるということですよ。B校は、クラシックバレエとモダンダンスが入っていて、ダンスが多いのが特徴ですよ。

(眞野構成員)

Aの特徴は、1年次に他の事をやっておいて3年次に選択の幅を非常に広げている。Cはまとめて劇表現で教えようとしていて、他のところが薄いというところ、お芝居を作るのを教えようという感じではないでしょうか。D校は、座学が少ないですよ。B校は実技が多いような感じがします。

会長（能祖構成員）

カリキュラムをどう組むかによっておのずと特徴は出ますよね。教育内容はこれで良いと思うのですが、カリキュラムを組むときに、具体的に、何年次にどの程度配置するかが相当大きなその学校の特徴になっていきますよね。

(眞野構成員)

劇団四季は入ってくると、一斉によーいドンですよ。

(近藤構成員)

研究生はそうです。

(眞野構成員)

経験が何年あろうが、高校を出たばかりだろうが、研究生になった瞬間に一斉に始めるということですか。

(近藤構成員)

そうですね。午前中のレッスンというのは全員同じカリキュラムで、午後のある時間だけは、入ってくる人によってダンサーで入ってくる人もいれば、歌唱で入ってくる人もいますので、弱いところを上手く組み合わせたカリキュラムを午後に組んでいくというやり方を我々はしています。

(眞野構成員)

演技者、表現する人間だけではなくて、他も一緒に進めていこうとしているので、演劇全般になってしまうのですよね。特徴を出すためには、他の科目で引き受けられるところは引き受けて、2、3年次に実技を厚くするとか、そういうこともカリキュラムを考える段階で考えないといけないと思います。

会長（能祖構成員）

例えば、体育でクラシックバレエとかコンテンポラリーダンスを引き受けることは可能なのでしょうか。もし可能であればそういう形で分散していくこともできますよね。

(田中構成員)

体育教師が教えるダンスであれば、既に体育の科目の一部分にあります。あくまでも体育の教員免許を持った者が教えないと体育の単位にはなりません。

会長（能祖構成員）

これから更に絞り込んで、具体的にどのような科目をどのような順番で配置していくか、それがおのずから特徴になるといいますか、どういう人材を育てたいのか、輩出したいのか、それに対してどういう科目、どういう順番が必要なのかということですよね。今、コンセプトと教育内容は出ているので、これを具体化する時に、どうしたら良いかということですよね。

(川端構成員)

神奈川県の特徴としては、個人的な考えですけれども、(1)の③、④そして(2)を重点的にやるというのはどうでしょうか。理論はやるとして、②は基礎ですから、3年間を通して取り組む科目になるかと思うのです。神奈川県だからできるという部分については、実際に演じることと、④の部分、これは神奈川県にある施設をフルにいかした形での指導法がもし生まれるのであれば、それを特色として打ち出していくことは可能ではないかと思うのです。色々なところに負担がいつてもうかもしれませんが、舞台技術について学ぶ機会を多く持ち、実際にそれを用いて発表できるように進めるというのが1つ提案できることかと思います。

(事務局)

先程、発表のお話がありましたけれども、Aは1～3年次に専攻で演劇という授業がございますので、公演ではないのですが授業成果発表会という形で、授業の中での成果を発表しているレベルですけれども、各学年で取り組んでいます。さらに、3年次には卒業公演をやっていると聞いています。Bは、1、2年次にクラシックバレエとモダンダンスを3単位ずつ必修でやっていますので、2年次にダンスの発表会を経験させて、3年次に集大成として劇場を借りて学科公演をやっているとの

ことです。Cは、Aと似ていますが、毎年次に劇表現という科目を置いていますので、1年次が授業を観てもらった形の公開授業公演、2年次は講座別の公演をやって3年次に卒業公演ということで、発表としては毎年やっているとのことです。Dの学校は、3年間の集大成で外部の劇場を借りて卒業公演をやっているということです。科目の配置ももちろんありますけれども、お話にあったようにどこかに焦点を絞って、年次ごとに成果発表はやっていくというものと、段々レベルを上げていって最後に卒業公演というものと、色々な組み合わせができるのかなと思います。

会長（能祖構成員）

ダンスの比重というのはそんなに高くなくてもいいのではないかと思います、どうでしょうか。基本コンセプトの3にダンスは入っていないですね、文言としては。もちろんミュージカルをやりたい生徒もいるかもしれませんが、身体のことを知るという意味でダンスが必要かもしれませんが、比重としてはそんなに高くなくてもいいのでなかろうかと思うのです、クラシックバレエ、コンテンポラリーダンスというジャンルによらず、ダンスという意味では。それから、劇場、例えばKAATで卒業公演というのは、3月の卒業の時期に公演をするというのは可能でしょうか。

（事務局）

他県ですと、進路の関係もあって、6月や8月頃に卒業公演をするようです。

（眞野構成員）

県のために年間2週間空けているのでそこで現在実施していることをそっくり青少年センターが引き受けてくれば。

（堀江構成員）

例えば、公演でなくても現場の技術を実際にKAATや青少年センターに行き行って学ぶとか。時期的にあえば。

（眞野構成員）

定期的に、例えば5月、6月あたりに高校生が来るので一緒にやるといえば、すごく上手くやれると思います。私たちにとっても非常にありがたいことです。外国の方などのインターンはものすごく数を取っている。それは、そういう方々に教えるということが皆にすごく意識されるので、非常に大事なことだと思ってできるだけ断らないようにはしているのです。

（堀江構成員）

演劇部があって、県大会に出るのであれば、それはそれで青少年センターの舞台を踏むことになりますよね。例えば3年次の卒業公演はめざせKAATということで、

非常に高いレベルのものをめざせば、それはそれで目標にもなるし、特色にもなると思います。それから、劇団四季さんはバックステージツアーを実施されていて、青少年センターの子どもたちも伺わせていただいて非常に喜んでいました。日常的には、舞台技術については、学校だけでなく、KAAT とか青少年センターとか、アマチュア劇団とかありますから、舞台づくりを一緒に見る、場合によっては一緒にやってみるということも、もしかするとできるかもしれない。

会長（能祖構成員）

そうすると、具体的なイメージというのは、見に行くとなると、授業の時間内ではできないではないですか、実際に現場に行くことは。そうすると課外授業になってくるのでしょうか、あるいは夏季休暇の集中講座とかということになるのでしょうか。

（川端構成員）

現在、演劇部が青少年センターに御指導いただいているのは、実際に平台の作り方をパンフレットというか、紙をいただいて教えていただいています。その都度、現場に行かないと学べないということだけではないかと思います。

会長（能祖構成員）

ありがとうございます。では、少しまとめたいと思います。繰り返しですけども、具体的な科目をどう絞り込んで、どう配置していくか、それから公演をどの程度の頻度で実施していくかということ。それから、県内の人材、施設とどう連携していくかということが、具体的な特徴の出し方になるかと思います。そこが要かと思います。

では次に、「その他」です。次回の議論に向けて事務局から説明をお願いいたします。

（事務局）

次回、「施設設備の整備」ということで、どの程度の施設設備が必要になってくるのかという御議論をいただきたいと思っておりますが、間にワーキンググループでの議論を挟みますけれども、その前提として資料4を御用意させていただきました。下に、参考として、資料3でお示ししたA～Dまでの高校の主な施設を載せさせていただいているのですが、1クラス規模と考えると3学年1クラスずつということになりますので、大体この程度のものが必要かなということ、上にイメージとしてお示しをしております。まず1つは、大スタジオと書いておりますが、演技や舞台技術の実習に使用することを目的として、あるいは、例えば校内発表会などの小規模の公演の場としても使用できるようにする。近接する教室がある場合には、防音対応などをした大スタジオを想定しています。大スタジオと言いましても、330㎡程度のものが1つ、付帯設備として、調光・調音室、大道具倉庫、バトン、照明

一式、音響機材一式、ロールバック方式の移動客席があるようなものを1つ整備する必要があるかと考えております。それから、20～25名程度に別れてレッスンを実施するというを想定して、レッスン室1、レッスン室2ということで、それぞれ120㎡程度のレッスン室があるといいのではないかとすることを想定してお示しをしております。このレッスン室については、床にリノリウムの継ぎ目がなくクッション性があるものを貼り、クラシックバレエ等をする場合にはレッスンバー、それから前方が鏡張りであって、音響機材一式が入っているような施設が必要かと考えております。また、ワーキンググループで議論の上、もう少し細かいものを次回御用意させていただきたいと思いますが、イメージとしてこのようなものを整備したら良いのではないかとことをお示しをさせていただきました。下に他県の状況をお示ししておりますが、Aの学校は※に記載させていただいておりますように、1学年を演劇専攻と舞踊専攻に分けていまして、更に舞踊専攻をクラシックバレエとコンテンポラリーダンスに分けていますので、展開数が多いものですから舞台演習室があって更に練習室が5つあるということで、かなり行き届いた施設設備になっています。それ以外の学校につきましては、舞台総合練習室にレッスン室1、2があるB。舞台実習室と演技実習室を設けて、大道具倉庫や楽屋、シャワー室を整備しているC。Dは、演劇室1、2があって、多目的ホール、この多目的ホールは他学科も使用していまして、大きなホールというよりは教室程度の部屋ですけれども、そういった部屋を用意し、そのほかにリハーサル室やメイク室等があるという状況でございます。大スタジオが1つとレッスン室が2つを、施設としては整備するイメージをお示しさせていただきました。

会長（能祖構成員）

ありがとうございました。施設も重要な要素だと思います。想定されている高校があればもう少し具体的な話が可能なのですが、現在そこがない中での議論になります。大きな考え方で良いので御意見をいただけますでしょうか。

（堀江構成員）

先程の教育内容で舞台技術まで書いてあるということは、倉庫だけではなく、製作所、工房という考えが必要だと思いますが、いかがでしょうか。

会長（能祖構成員）

そうですね。劇場は別にあるのでしょうか。

（事務局）

公演をする場所は別のところ、ただ大スタジオでも小規模な公演などはできる、ロールバックの客席などがあれば、その前で発表するということはできるかなと思っております。お客さんを集めての卒業公演などは別の場所で行うことを想定しています。

会長（能祖構成員）

では、大道具製作室、通称たたき場のようなものは、その劇場に設置されているのでしょうか。

（事務局）

大道具倉庫は記載させていただいておりますが、製作する場所までは、現時点で想定しておりません。

（堀江構成員）

先程の教育内容で、舞台技術というのは何を教えるかということですよ。

会長（能祖構成員）

眞野さん、330 m²でロールバックというと客席数はどのくらいなのでしょう。

（眞野構成員）

結構大きいですよ。舞台を大きくしなければ 200 くらい取ることも可能でしょう。

会長（能祖構成員）

それであれば、大スタジオだけで十分な感じもしますね。

（近藤構成員）

小劇場くらいの規模はありますよね。

（眞野構成員）

これに楽屋を付けたりすれば、劇場としても使用できますよね。ちょっと工夫を凝らせば、今なら KAAT より良いものができるかもしれない、お金もあまりかけないで。私たちも、10 も 15 も劇場を拵えて、ようやく削ぐことを覚えてきたので、スタンダードなスタジオが以前ほどはお金がかからないでできると思います。

（堀江構成員）

既存のどこかの高校を改造していくイメージなのでしょう。

（久我構成員）

新しくホールを作ったり、スタジオのある学校を新設するということではなく、改修をイメージしています。

(堀江構成員)

そうすると大スタジオを 330 m²、天井をぶち抜いて作ったとしても、天井の高さはあまり期待できないし、構造上ある程度防音仕様ができたとしても、防振、つまり皆飛び跳ねますから、そこまではできないということでしょうか。

(久我構成員)

そこまで、防音性、防振性がしっかりしたところでないと、専門学科として厳しいということになると、そういうことが可能な学校を選ぶ、あるいは新しく作らなければいけないという話になるかもしれません。ある程度のところがカバーできれば学校としては十分でしょうということであれば、その線で学校を選んでいくということになるかと思います。

(眞野構成員)

各高校で想定される場所があれば、そこに最適化した設備を考えることができるように私たちもようやくなってきました。例えば、270 m²しかない、200 m²しかないということであれば、200 m²の中で、最も効率の良い、質を高めた空間にしようということであれば、知恵を貸す事はできると思います。

(事務局)

他県の学校では、大道具ですとか小道具を作るときは、極端な話で言うと、廊下ですとか、少し広いところを使用して対応している学校が多いようで、そういう部屋までは、他県でも持っていない。

(堀江構成員)

要するに、シンナー中毒にならないような空間が必要なので、テラスがあるところはそこでやるかもしれませんね。

(川端構成員)

ピロティでやっているところもありますよね。

(堀江構成員)

教室を潰して大スタジオを作ったとしても、高さが取れないのであれば、いくらロールバックの客席を設けても、あまり人は収容できないし、避難経路が確保できなければ定員はあまり置けない。つまり、公演を打つのか、公演を打つとしたら何のためのものなのか、ということですよ。学校公演で年1回やるとすれば学校の講堂を使ってもいいかもしれないし。小規模なものを大スタジオでやるということであれば、ロールバックの客席を設けるとお金もスペースもとるので、仮設の椅子をならべるだけで良いのではないかと、最後はその議論になってくると思うので

す。卒業公演は、KAAT を使うとか。全部ここで賄うとなると相当のお金がかかりますよね。

(久我構成員)

全て自前でというイメージではないです。借りられる所は借りた上で、というイメージです。

(堀江構成員)

逆にそこを特色にして、KAAT や青少年センターと連携していくということが売りになるのかもしれませんが。往復の時間があるので、半日、あるいは1日 KAAT や青少年センターにいるということになるかもしれませんが、そういう工夫は可能なのですよね。

(久我構成員)

そこは工夫しないといけないところだと思います。

(眞野構成員)

やはり入学してすぐに KAAT に行ったり、可能であれば劇団四季の稽古場に連れて行ったりということをする、ここで学んでいることはこういうことなのだ、ということがうっすらとわかると思うのです。中途で見せても駄目だと思うのです、最初に見せない。公演をするよりも。こういう学科に入ったのだ、こういう学科を選んだら、場合によっては、こういう場所に自分が出たり、演出したり、デザイナーになったりということができるのだということを見せるのがいいのかなと思います。ただ、今は普通の講堂でもちょっとのお金をかけるだけで改装は十分にできますし、新国立劇場の研修所なども昔の小学校を使っていますが、防音などに手を入れた様子もないので、そんなに難しくはないと思います。

(久我構成員)

この設備の中でどういう工夫ができるのか、最新の技術であるとか、考え方をアドバイスいただけるということであれば、むしろ特定の施設を想定して相談、議論をした方がいいのかもしれないですね。

会長 (能祖構成員)

そちらの方が現実的ではありますよね。

(久我構成員)

必要最小限これくらいは必要だろうということで、今、資料4で示されているので、これくらいの設備とか部屋というのは、これまでいくつか色々なところを見させていただいた中から出ささせていただいたということです。

会長（能祖構成員）

発表する場が1つ、稽古する場が2つは必要だろうということですよ。それはそうだと思います。あとは、そのグレードをどこまで上げていくのか。上げられるのか上げられないのか。プロが使う場所であるとか、プロの機材を見せる事は本当に重要だと思うのですが、最初に眞野さんがおっしゃった姿勢という意味でも重要だと思うのですが、自分たちで空間を作っていくとか、自分達の間という意識も大事だと思うのです。自分たちの場なので、ここをどう工夫していくか、ということはすごく大事だと思うのです。それから、誰も彼もがプロになるわけではもちろんなくて、それでも演劇を高校のときに学んだ人として、よく言われますけれども、社会に出たときに、コミュニティ・ダンスが役に立つとか、演劇的なものの見方が役に立つとか、そういうことも大事なかなと思うのです。その為には、こういう場づくり、自分たちの場を自分たちで作っていくというような場所があった方がいいのかなという気はします。

（堀江構成員）

自分たちの場、要するに、高校生レベルの技量で、安全に触れるということになるとあまり立派なものでない方がいいかもしれませんね。天井高がありすぎると、作業に資格が必要だったりしますよね。あるいは、ロールバック・チェアだとどちらかというところプロセニウム演劇を想定しているのかもしれませんが、今や客席の作り方は様々ですよ。三方向に客席があったり、あるいは客席の周りで演劇をやっていたり。そういうことを想定するのであれば、かえってブラックボックス的に、あまり作り込まずにやった方がいいのかもしれない。自由に使える、あるいは安全性の範囲内で自由にいじれる、場合によっては壊せるような空間として作った方が良くないかもしれません。場合によっては、床に穴を開けてもいいとか。KAATはそういう思想を取り入れて作っていますし、これからはそういう考え方の劇場が増えてくると思います。あまり作り込まないで、場合によっては壊れても簡単に補修ができるような作りの方が良いかも知れないですね。

（眞野構成員）

高校の教室はどのくらいの大きさなのでしょう。

（田中構成員）

ほぼ正方形で、11m四方くらいですね。

（眞野構成員）

私は講堂を改築して使うという方が、あるいは今ある教室を何とか工夫して使う方が、生徒が学べる場所を作るという方がおもしろいと思います。こういうスタンダードがあります、そこでこういうふうに勉強しろというより、ずっとおもしろいと思います。私が教員だったら、最初の1年生が入ってきたら劇場作りから始めま

すね。すでにある建物を一度スケルトンにしてもらって。そうすると、全部がそこで教わっていくことになるのでおもしろいですよね。ただ、そうはいかないですよ。各市町村に設置されている公共の施設がありますので、高校が設置されている市町村の施設を活用するようなことも考えると良いと思います。色々なところが色々な活動をしていて、すごく素敵な活動をしている地域もあるので、そういうところとも上手く連携ができれば良いなと思います。

会長（能祖構成員）

ありがとうございます。他に御意見はありますか。

（荒木構成員）

授業がどういうものかというのが出てくる中で、どういう教室が必要ということも出てくるのかなと思いついていたのですが、最低限これだけということであれば、これまでお話にあったように色々なことが可能なのであれば、どこの学校と区切ることなく色々な選択肢があるのかなと今お話を伺いながら思えたので、大変ありがたいことだと思います。

会長（能祖構成員）

演劇部があった場合、演劇部もここで稽古をしたりするのでしょうか。

（荒木構成員）

おそらくこれだけのものがあれば使いたくなるのでしょうか。

会長（能祖構成員）

そうですね。演劇部はどこで稽古をしているのですか。教室でしょうか。

（川端構成員）

そうですね。大きな施設があるところはそちらでやっておりますけれども、本校のようなところは少しスパンがある教室でやっています。

（眞野構成員）

私もいくつか高校を見たことがあるのですが、改造すればいい場所になるなと思える高校がありました。3校ほど見たのですが、それぞれ持ち味があって、レッスン室を作ったり、講堂を改造したりするとすぐに使えるなという学校もありました。

会長（能祖構成員）

課外活動や自主稽古などを想定すると、欲を言えばレッスン室がもう1つあるとよいかと。言い出すとキリがないのですがね。レッスン室1、2は授業の範囲で

すよね。もう1つあると、色々使い勝手が広がってくるのではないかなと思います。

会長（能祖構成員）

今の議論を踏まえて次回までにたたき台を御用意いただき、協議をしたいと思えます。熱心な御協議ありがとうございました。それでは、そろそろ時間になりましたので以上を持ちまして、第3回の協議会を終了させていただきます。